

第一章 旗のもとに

森の神の夜

千年あまり前――

祖先たちは、はるかなる海を越えて、この大地に辿り着いた。

彼らはその地を「アオテアロア」と呼んだ。

白い雲の大地。雲は岬を覆い、黒き砂浜に影を落とす。稜線にまどわる霧は光を受けて揺れ、波は絶え間なく打ち寄せていた。その光景を名に刻み、彼らはここに新しい世界を見いだした。

大地は、ただの居場所ではなかった。森のざわめきは息遣い、湖のきらめきは瞳、山影は祖霊の横たわる姿。この大地そのものが祖霊の体であり、人はその懷に抱かれて生きていた。

――北島の奥、ワイボウアの森。

深い闇の底から、かすかなコアウアウ（笛）の音が流れ出す。

霧をさまよう旋律は、祖先の魂と精霊を結び合わせていた。その森は、いにしえの

ゴンドワナの名残をとどめる太古の森。湿り気をたたえたシダやニカウのあいだに、カウリヤトタラの巨木が天を衝く。熱帯の植物と針葉樹が同じ大地に息づく、不思議な混合林。その姿は、この地の歴史の複雑さを映す鏡のようであった。

笛の音に、人の声が重なる。

「テ・ポウ…… テ・ポヌイ…… テ・ポロア……」

——闇よ、はじまりの闇よ。

われらはその中に還り、その中から再び生まれる。

言い伝えによれば——天空の神ランギヌイと、大地の神パトウアヌクは、互いに抱き合い、世界を闇に閉ざしていた。光を求め、海の神タンガロアは波を起こし、風の神タウフィリマテアは風を呼んだ。だが、ふたりは離れようとしなかった。そのとき、森の神タネ・マフタが逆立ちになり、両手で大地を押さえ、足で天空を突き放した。大地と天は引き裂かれ、闇に光が射し込み、そこに初めて命が生まれたのだという。

——タネ・マフタは、神話の中だけの存在ではなかった。いまもこの森に立ち続けている。高さ約五十五メートル、幹回り約十四メートル。星明かりと炎の揺らめきもなく、巨木の影は夜空に浮かび上がっていた。

ルル（ふくろう）の声が、一定の間隔で闇に響いた。澄んだ高音と、低くかすれた鳴き声——キーウイの声が交互に夜を刻んでいく。

そのころのニュージーランドは、まだ原生林に覆われていた。のちに伐り払われ、牧場や町へと変わる前の姿である。

炎に照らされた人々の顔は、どこか悲しげで、同時に耐えるかのような眼差し、胸にはヒスイの首飾り、羽衣のようにまとったキーウイの羽。顔や顎に刻まれたモコ（入れ墨）は、祖先から受け継いだ誇りの証である。

火の粉が夜空に舞い上がり、やがて星の群れに溶けていく。天の川、南十字星――その一つひとつが物語を宿し、森とともに静かに見守っていた。

火を囲む人々の唄は、やがて途切れた。

代わって、沈黙が森を包み込む。その静けさの底に、誰もが同じ気配を感じ取っていた。森の鳥たちも声をひそめた。ただ、風が木々を揺らし、炎が闇の中で揺れ、神々の気配が、遠い笛の音に溶け込むようにふと蘇った。

旗を裂く者

一八四五年。

北島の最北、ラッセル、かつて「コロポポ」と呼ばれた町。海とともに生き、穏やかな暮らしが続いていた頃の名残が、まだ入り江の空気に残っている。

その海岸にひとりの男が立っていた。

ホネ・ヘケ――。

ンガープヒの名門の血を引く戦士であると同時に、キリスト教の洗礼を受けた敬虔な信徒でもある。額に刻まれたモコ（入れ墨）は、先祖から受け継いだ誇りの証であり、瞳には、内なる火を秘めている。三十五を迎えたばかりの細身の体は茶褐色の肌。縮れた長い髪が、深くかぶった船乗り帽の脇から、風に揺れている。

彼のもとへ、若い衆が駆け込んできた。

「……また、やられました」

何が起きたのか――ヘケにはすでに察しがついていた。パキハ（白人）たちが、また土地を求めてやって来たのだ。「金なら払う」と言われ、「土地は自分ひとりのものではない。祖先から受け継ぎ、村人みなで守ってきたものだ。売ることなどできない」と答えると、パキハは、紙を一枚差し出し、「皆のものというなら、私も『皆の一人』ということ、その証として、ここに署名を」と言い放ったのだ。

意味を理解できないまま署名させられたことはすぐに察しがついた。もともと文字を持たないマオリにとって、書名などただの記号にすぎない。白人たちもそのことを知っていた――。翌朝、いつものように土地を訪れると、銃を構えた白人が立っており、「ここはもう俺の土地だ。お前は契約書にサインをしている。立ち去れ」と銃口を向けてきたのだという。

「すでに仲間が……またしても数人、殺されました」

若い衆は俯いたまま声を絞り出した。

ヘケは目を閉じた。自ら条約に署名し、さらに各部族にそれを勧めたことを、深く恥じた。

「我らの選択が、多くの命を奪った……」

五年前、彼は、白人とマオリが共にこの地を治める理想を信じ、ワイタンギ条約に署名した。一八四〇年二月、歴史的なその日に結ばれたこの条約は、未来を築くための約束とされた。だがその時すでに、ヘケの胸には疑いがあった。イギリス側は「我が連邦の一員になれば、フランスをはじめ侵略者から守る」と言った。言葉は美しい。だがその奥にある狙いは土地だろう——。アオテアロア（ニュージーランド）はジェームズ・クックの上陸以来、道具や農法、信仰を得た一方で、病や銃によって文化が崩されてきた。近年では、同じポリネシアの兄弟であるアボリジニが列強に容赦なく迫害されているとの報せも届いていた。

ヘケは考え抜いた——この地も、やがて同じ運命をたどるのではないか。いや、すでに始まっている。どうしたら我ら一族を守れるか。もはや後戻りはできぬ——。彼はかつて宣教師たちの誠実さに触れ、自らも洗礼を受けた。——同じ信仰を持つ者同士ならば……イギリス人が本当に“良き友”であるならば、きつと——。ヘケはわずかな希望に賭け、条約を決意し、各部族に署名を求めて歩いたのだった。

しかし、五年を経た今、目の前に広がる現実には、あの日に抱いた夢とはあまりにかけ離れていた。ヘケは目を開き、表情を引き締めた。

心は決まった。

——その日の夕刻。

ホネ・ヘケは一人、コロポポ（ラッセル）の丘に登った。

そこにそびえる英国の旗——ユニオンジャック。斧を手に、ゆつくりとその前に立つ。そして、腹の底から声を猛り出した。

「ヒー、ハー！」

掛け声とともに斧で旗竿を裂き割った。ユニオンジャックがもつれ、風の中に崩れ落ちる。木の軋む音とともに、竿は大地に倒れ伏した。折れた木を手に、ヘケは空を仰ぎ、言葉をこぼした。

「我らが望んだのは共存だ。支配ではない」

——これが、この地に掲げられた最初の反旗、すなわち、英国に対し、マオリが初めて宣戦の意思を示した明らかな印であった。

この続きは、以下のアマゾンキンドルでお読みいただけます。